

慈眼寺たより

第24号
平成30年7月
春日井市下市場町
「慈眼寺」
電話 81-6801
編集 伊藤秀文

☆僧堂生活(3) 坐禅体験★

春日井律舟

太祖慧可は達磨大師の法を嗣ぐ為に自らの臂(ひじ)を断った。道元禅師は天童山で「極寒極熱に修行の末、病に死なば本意なり」と誓願を立てられた。実際に共に渡宋した禅師の先輩にあたる臨済の明全様は命を落とされている。日本でも通幻大和尚の指導は厳しく、時には活埋杭と言つて、悟りを開かない僧を生き埋めにもすることもあったという。この様なイメージを現代の雲水に抱かれている方には今回の話は少し幻滅されるかも知れない。僧堂の日々の生活は、行事も決まり事等がとても多く覚える事は沢山あるが、テレビやスマホも無く外界とも

あまり接触が無いので刺激は少ない。たまにある短い休憩時間も看読寮(かんどくりよう) (各々一畳分のスペース)に机があり勉強する所)は横になる事は勿論許されておらず、基本正座で原則として会話が禁じられている。

ささやかな楽しみの一つに毎週木曜日、「パンの日」がある。木曜の昼にパンの販売の車が山門に来て時間が合えば買いに行く事が出来るのだ。この菓子パンは雲水にとつて結構な楽しみで、急な仕事が入ったりして買いに行けないと絶望する者もいる。しかしこれも上山して百日過ぎて、お経点検に合格しないと行く事は出来ない。その百日禁足が解けると他にも出来る事が増えてく

る。手紙のやり取りが出来るようになるのもその一つだ。残念なことに私は禁足終わって暫して彼女に振られていたのでこの恩恵は全く受けなかった。「パンの日」を全力で楽しみにしていた。



そんなある日同期の雲水に役寮さんが手紙を届けに来た。「栄信!母さんから手紙きたぞ」。隣にいた私は何の気なしに覗き込んだ。宛名(雲水栄信様) 差出人(木村真奈美) それを見て違和感を覚えた。確かに栄信の苗字は

木村だけど母親がこんな宛名を書くか?しかもえらい丸っこい字だ!「お前の母ちゃん名前は真奈美か?」「違います」「それは誰だ?」「分かりません」看読寮に激震が走った。どうやらそれは栄信が担当した坐禅体験の女性

〈青柳歌壇・俳壇〉

●慈眼寺の屋根のカーブよ梅真白
●梵鐘の鋳型の竜よ梯梧の花
伊藤清雄

●一面の菜の花畑や孫走る
●座り込み両手で抜けり夏の草
伊藤貴美子

●水口へ野の花供へ粃を蒔く
●友の墓訪ねし安堵土筆摘む
矢野孝子

●破れたるジーパン若きのファッションと見るともなく見る数多の破れ
た

●ときどきに我が膝元に這い寄りて抱いてをねだる曾孫あいらし
●老いの身に寒波は厳し昨日今日萎縮しがちな我に鞭当て

今井正

客二人のうち一人からのお札の手紙で苗字は偶然にも一緒だったらしいのだ。栄信は「僕もこんな経験は無いのでどうしたらいいか困っています」と全然困っていない

さそうな顔で言う。「よし！ならみんなで文面を考えてやるからすぐ返事を書け」と提案してみたが、みんなでの所は却下され、彼は古参に見つかからないように夜中にせつせとトイレで一人返事を書いていた。

その後暫くの間坐禅体験の案内が入ると雲水達に一緒に（次は俺か？）と緊張が走ったがそもそも若い女性のお客自体が少なく、その様な奇蹟は二度と無かった。役寮さんに言わせると「昔は坊主はモテたから俺達の頃はそんな話はしよつちゅうだつたよ。お前らは情け無いんじゃない！」という事らしい。

プライベートも考え仮名を使わせて頂きましたが記憶に残る出来事です。やりと

りは暫く続いていましたがそのうちに返事がなくなつたようでした。

★夢を叶えた伊吹山登山☆

今井正

私は幾重にも山に囲まれた小さな集落で生まれ、子供のころは奔放に山野で遊んだ。この齡になつても山は大好きだ。もう二十年ほど前から青春一八切符であちこちに出かけ各駅停車の多い旅を楽しんでいる。関西や北陸方面にもよく足を伸ばすが、列車が柏原く近江長岡間を走行時、車窓から威風堂々と立ち居する伊吹山の雄姿をじっくりと望む。そんな時、「何としても一刻も早く麓から山頂まで歩いて登りたい」との熱い願望をたぎらせていた。退職した年に記念に富士山、翌年に田の原から御嶽にも登った。近くでは尾張富士、三国山、猿投山、御在所、藤原岳などに登つて、それなりに英気を養つてきた。

小学四年生から多治見の本校まで片道七キロ、往復十四キロを週に六日歩いた。そんな積み重ねが効いているか否かは不明だが、八十五歳の今でも足腰は丈夫でいたつて健康。本当にありがたいことで心から感謝し、日々の世過ぎに對峙している。「第一の財産は健康なり」を座右の銘とし、この先も虚心坦懐、しっかりとゆつくりと歩を進めたいと念じている。余談は扱措き、伊吹山登山の熱い思いは断ち難く行動に移した。伊吹山の山開きは四月一日だが、その前でも登山は許されていている。一昨年の三月二十九日、早朝に家を出て神領駅へ急いだ。列車を二回乗り換え近江長岡に到着。駅前「伊吹山登山口」行きのバスに乗る。客はたったの三人。登山口で帰りの終バスが十七時三十分であることを確認。大きな看板に「伊吹山は滋賀県の最高峰、一三三七メートル、山頂まで六キロ」な

お盆のお知らせ

① 棚経の日取り

八月十日 熊野、神領方面
八月十一日 穴橋（県道東）
堀北

八月十二日 浅山、鳥居松

八月十三日 勝川、名古屋

八月十四日 四谷、南部

八月十五日 下市場

穴橋、篠木、関田

上条、高蔵寺、坂下

右は原則です。個別にお知らせいたします。

② お施餓鬼

お施餓鬼は毎年八月十八日です。今年は土曜日です。

七月一日から受付をしております。早い時間帯は予約済みになつております。ご希望の方はなるべくお早めにお申し込みください。

電話で結構です。お布施は今までどおりで

初盆施餓鬼 五万円

特別大施餓鬼 三万円

大施餓鬼 二万円

合同施餓鬼 一万円

今年も棚経は、原則として律舟が回らせていただきます。

どと書かれている。三ノ宮神社に登山の無事を祈る。さあ登山開始。

今九時半だから終バスまで八時間はある。はやる気持ちを抑え山頂を目指し歩を進めた。合目ごとに小休止して喉を潤したり、レモンを齧ったりして体力の保持に心した。六号目あたりから山頂までの登山道は狭くて悪く難行苦行の連続だった。山頂の一等三角点まで五時間余りも要し相当の疲労を覚えた。その場に居合わせた青年に数枚写真を撮ってもらった。日本武尊の像と弥勒菩薩に手を合わせる。山頂から北に白山連峰、西に琵琶湖が東に南アルプスが、三六〇度の素晴らしい大パノラマに堪能した。登下山は想像以上に苦しかったが、日帰りで何とか目的を果たし心は高揚していた。時期尚早で山頂の薬草、高山植物、お花などが見られず、ちよつとだけ残念だった。ずーっと前からスキ

ー場も三合目まで運転していたゴンドラも廃業、一合目辺りに三十もあつた民宿も今はたつたのっただけ。時代の波は容赦なく伊吹山にも蔭を落としている。

伊吹山よくぞ登つた麓から
八十三歳小さな快挙

☆説法(修証義 総序)★

住職 春日井浩道

修証義のお話も最終回になりました。最終回到序章とはいぶかられるかもしれませんが、序とか総論とかは抽象的で分かりにくいいため、具体論を述べてからまとめとしたほうがよくわかると思つたからです

序ではまず、「生きる」ということはどういうことかをしっかりと認識することが、仏教徒としての立場だと書いてあります。そしてきちんと死生観を確立すれば、それは即ち解脱の心境であつて、もはや生とか死とかにこだわらなくなるということが

書いてあります。逆に言えばそういう心境になれるような、死生観を確立しなさいということですよ。ジタバタしてもしようがないことにはジタバタするなということですよ。誰もが生まれたくてこの世に生まれたわけでもなく、気が付いたら生きていたというわけですよ。でも私個人がこの世にいなかったら、今私に認知しているこの世の全ても存在しなかつたわけですよ。寝ている状態では何も感じできません。それが永遠に続くだけです。もちろん目も覚めませんし、認識の主体も存在しないので、一切が「無」なのです。

要はこういう事実をきちんと認識して、自然の節理には逆らわない、こだわらないという姿勢を保つことなのではないかと。

仏教には、ほとんど教義というものがありません。それぞれが事実を感じ、それなりに死生観を作つてゆるぎないものにしていく、それが仏教だと思ひます。

生まれたおかげで、そして育ててもらつたおかげで、この百年弱ほどの喜びも悲しみも味わうことができるのです。すべてが偶然に偶然を積み重ねた出来事なのです。そして命というのは、水が高きから低きに流れるように、熱が高温から低温へ流れるように、絶えず変化を続けていくのです。実は、命でなくともすべての存在がそうなのですが、生命あるものは、けた違いに、その変化が速いということなのでしょう。

その瞬間的な命を豊かなものにしていくために二章以下の具体的な方法が書いてあります。これで修証義をおわります。

暑中お見舞い 申し上げます

檀方総代	伊藤辰男
伊藤久幸	伊藤秀文
伊藤正廣	大野和義
大野悟	木村廣孝
春日井浩道	春日井律舟
住職	
徒弟	

★お墓の継承について☆

現在、寺前の墓地については数か所の空きがあります。皆さんいろいろな事情で返却されるようです。特に最近ではお墓の継承者がいなくなるという理由で返却される方は多いです。

設立時には申込金の返却はしないという方針でしたが、しばらく全額の返金をしてまいりました。現在では六割の返金をしております。

お墓は昔は、土葬の埋め墓と参り墓に分かれておりまして境内にあったのは参り墓の方でした。鎌倉時代以前は庶民は、死ぬとどこかへ捨てられるのが一般だったよ

うです。それが土葬の禁止によつて火葬中心になりお墓の一元化が進みました。やがて社会が核家族化するにつれてお墓もそういう傾向になり、最近の少子化とともに継承者がなくなるお宅も出てきました。

最近では、合祀墓である観月苑を希望される方も多いです。家族風呂と温泉の大浴場くらいの差です。お気軽にどうぞ。

精霊流し

お盆のお飾りなど以前は、川へ流していましたが、ここ十数年は檀方総代で回収しております。今年も八月十五日の四時半から山門のところで受けつけます。

☆世相雑観★

今年一番の動きは米中接近です。何を思ったか、金正恩が軟化しました。今までのように力んでいるばかりでは自分の立場も危うくなる。韓と気が付いたのでしよう。韓国にしてみても、以前の朝鮮戦争の時と違ってこれだけ

発展した社会を火の海にされてはたまりませんので、一所懸命に懐柔したようです。罵りあっていたトランプさんもうまいこと乗って持ち上げる始末です。まあ、お互い独裁者だからできる芸当なんでしょう。日本は相変わらず厳重制裁を唱えているだけですがどうなのでしょう。拉致被害者の取戻しが最重要なのはわかりますが、それは彼の国の体制が変わらないことにはどうにもならないような気がします。社会主義というのは天下挙げての無責任体制なのです。それを

を変えることは彼の国の国民が決めることです。そのためには世界の情報がどんどん彼の国に流れ込むことです。どんどん交流が進めばいいと思います。

サッカーのワールドカップで日本が決勝トーナメントに残りました。いろんな駆け引きがあるようです。決勝を決めた試合もまるで亀の

子のようにうずくまつたというか、柔道だったら減点されそうな試合でした。頑張ってください。

★編集後記☆

今年は季節の移ろいが速いようです。冬はわりに寒かったのに桜もいろんな花も早く咲きました。関東は六月二十九日に梅雨明けと発表がありました。六月二十五日にはなんとクマゼミが鳴きました。草取りをしていたらお宮の方角から聞こえてきました。耳鳴りかと思つたほどです。二度も続けて鳴いたので間違いありません。セミも独りぼっちだったので、もう一度寝に帰るといいうわけにもいかないでしょう。暑くなりそうです。熱中症には気を付けてください。

「慈眼寺たより」 第二十四号

平成三十燃七月十日 発行

ホームページ

←

←
<http://www.ma.ccnw.ne.jp/jigenji/>